
堂々美女 VS 謎の才女

榛名屋 忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

堂々美女 VS 謎の才女

【Nコード】

N9405N

【作者名】

榛名屋 忍

【あらすじ】

「堂々乙女と秘密の美女」「堂々美女と下僕男子」「堂々美女と世話焼き男子」「サンクトペテルブルクの夜明け」の続編。佳恋の事務所にアメリカ帰りの秀才・柊みちるが加わった。悟の元同級生であるみちるが芸能活動を始めたことでもますます悟への注目が集まり…。

プロローグ

携帯電話の留守番メッセージに、一件のメッセージが録音されていた。

「柊みちるだけど、桐原くん、遠藤さんが死んだって聞いた？それで、私、桐原くんに告白しようって決めたの。遠藤さんが桐原くんのこと狙ってたみたいだから言えなかつたんだけど、私、桐原くんのこと好きなの。お葬式が終わったら、返事聞かせてね」

暗い部屋の中、携帯電話のディスプレイの明かりだけが部屋を照らしている。俺は携帯電話を床に叩きつけた。そして、用意した口グープに首をかけた。

激しい火花

鈴音のおかげで報道に規制がかかったのか、俺のマンションや大学の周りは静かだった。モデルのカレンが桐原悟と同棲しているという噂は消えていないものの、まだ俺は佳恋さんを家に招いていた。「柊みちる？」

「ねえ、悟くん知ってる？」

佳恋さんは今日撮影したばかりという写真を取り出した。眼力の強い女性が写っている。タイトなスーツにメガネを掛けて「デキル女子」を表しているらしい。

「同級生にそんな名前がいましたけど」

「ふうん…じゃあ本当なのか」

佳恋さんは写真を手にとって不思議そうに見ている。

「柊みちるがどうしたんですか？」

「うちの事務所にモデルとして入ってきたのよ」

俺は驚いた。かつての同級生がモデルになったというのだから、

驚かすにはいられない。しかし、そこにはもうひとつ理由がある

「へえ…意外だな」

「意外？」

「学級会長をやってて秀才で、確かに美人だって言われてたけど…将来は外交官になるって言ってましたから」

別に頭の良い人がモデルをやってはいけないということではない。

ただ、モデルを目指すようなキャラではなかったと思うのだ。

「外交官ねえ。彼女アメリカ帰りらしいわよ。」

「へえ」

「しかも大学を飛び級で卒業よ。ホントすごい子ね」

「その柊みちるがモデルですか」

「そうなのよ。それで、私に言ったのよ…桐原くんのこと諦めませんからって」

俺はその言葉に耳を疑った。そして、返す言葉を見つげられずにいた。

「……」

「ただの同級生？」

「ええ。ただ…変なことを言われたことがあります」

「変なこと？」

「まるで遠藤が死んだのを喜んでいるみたいだったな」

「それは変よね…」

遠藤の葬式の日。俺は部屋に閉じこもっていた。同級生の多くは行ったはずだ。学級のリーダーだった柊みちるも代表として参列したはずだ。しかし、俺は遠藤の死に責任を感じていた。部屋で首をつろうと思っていたのだ。俺は家に一人でいるものだと思っていたが、ちょうど帰ってきた父が異変に気づいて部屋の戸を開けた。それで俺は一命を取り留めたのだった。そして、即転校することが決まり、柊みちるとは二度と会うことがなかった。

数日後、俺は佳恋さんが仕事をしている撮影所の前にいた。忘れ物をしたというので優と共に届けにきたのだ。しかし、出てきたのは写真で見たあの柊みちるだった。力強い目と艶のある黒髪、そして堂々としたオーラ。佳恋さんの事務所の後輩にはふさわしいモデルと言えるかもしれない。

「あー。桐原くん！久しぶりっ」

柊みちるは勢い良くこちらへと向かってきた。隣で優が口をポカッと開けている。

「ええと、中学二年の時に会ったつきりだよな。あの、遠藤さんのお葬式の日に学校で会ったのが最後。うわーっすごく嬉しい。」

俺はどう応えて良いのかわからなかった。こんな人だったろうか。もっと静かな人ではなかったか。本当に柊みちる本人なのかと疑いたくなるほどだった。

「桐原くん、なんで佳恋さんと付き合ってたんの？あの人、顔とスタイルが良いだけじゃない。私に乗り換えない？」

「終みちるはどんな話を続ける。俺は不快だった。」

「お前にそんなことを言う権利はないだろ。」

「だって、桐原くんのこと好きなんだもん。諦めたくないんだもん。」

「

「は？」

「あ、佳恋さん来ちゃった。またね」

「ようやく佳恋さんが現れて、俺はほっとしていた。」

「姉さん、はい、これ」

「優がバッグを手渡す。」

「ありがとう。みちるちゃんは何か言ってた？」

「別に」

「俺はそう答えるとその場を立ち去った。」

迷惑才女登場

「ピンポーン」

ある日の夕方、夕食の支度をしているとチャイムが鳴った。インターホンで確認すると、それは柘みちるだった。

「桐原くん、来ちゃった」

「柘さん？」

外には報道陣の姿も見えた。きっと柘みちるがこの建物に入るところを写真に撮られたために情報を流したのだ。

「誰に聞いたの？」

「ヒカルくん」

ヒカルのやつ、そういえば柘みちるとは幼なじみだと言っていた。それにあの天然ボケだ。教えてしまうのも無理はない。

「申し訳ないけど、うちに入れることはできないよ」

「ふうん。じゃあいいや」

声がしなくなったと思いきや、鍵を差す音がした。このマンションは鍵を挿し込まなければエントランスの自動ドアも開かない。どこの部屋かはわからないが、柘みちるは鍵を開けられる。自動ドアの先へ向かう姿は、報道陣には俺の部屋に向かったとしか見えないだろう。

「佳恋さん」

俺は客間にいた佳恋さんに声をかけた。こちらの様子には気づいていなかったらしい。

「どうしたの？」

「優の部屋に行きましょう」

「え？」

「柘みちるがこの建物のどこかにいます。すぐに出ましょう」

「でも、もし鉢合わせになったら…」

俺はそのことについても考えていた。おそらく相手はエレベータ

「で来る。」

「階段で行きましょう。先に俺が廊下の様子を見ますから」

「わかった」

俺と佳恋さんはバグ一つを持って部屋を飛び出した。怪しまれないように部屋の明かりはつけたままで。廊下にはまだ柗みちるはいない。エレベーターは不気味に上昇を続けている。俺の部屋は上層だからエレベーターを待っている余裕はない。階段を急いで駆け下りた。

一階まで降りてみたが、柗みちるの姿はなかった。俺はあえて報道陣たちの前で佳恋さんと手を繋いでみせた。みちる狙いの報道陣が驚いた様子でフラッシュを焚く。突然のことに佳恋さんが顔を赤らめる。

「いま、柗みちるさんがマンションに入っていきましたが」

「柗さんもこちらにお住まいなんですか？」

「桐原さんを訪ねられたのでは？」

「そんなわけではないでしょう」

報道陣をかわしてバイクに乗ると、俺は優のアパートに向かった。

才女の罇

突然の来客に優と鈴音は驚いたが、事情を話すと快く迎え入れてくれた。

「柊みちるさん、ですか」

「まるで芸名みたいだね」

優と鈴音は顔を見合わせた。

「本名なんですって」

佳恋さんが応える。

「顔を見たけど、確かに柊さんだった」

「かつての同級生がなぜ今頃…？」

鈴音は心配そうにこちらを見ているが、優は少しおもしろがっているようだ。

「悟って人気者だったの？」

「いや…むしろ嫌われてたかな。いわゆる不良だったから」

「意外ですね、こんなに温和な性格なのに」

鈴音が言つと佳恋さんが俺の腕をつついた。

「そんなことないわよね、悟くん」

「だね」

にやにや笑う佳恋さんと優に、鈴音は首を傾げた。

「悟さんって恐ろしいんですか？」

「ははは…どうだか…」

佳恋さんは茂木への態度から、優は五十嵐との一件から、俺の凶暴な一面を知ってしまった。鈴音に見せて気持ちの良いものじゃない。軽く笑って誤魔化した。

ひとまず夜が明けたので、俺はマンションに戻ることにした。報道陣は気になるが、大学へ行くこうにも教科書やノートを置いてきてしまったのだ。佳恋さんの仕事道具もついでに運んでこよう。隣で

眠っている三人を起こさぬように、俺はアパートを出た。

バイクを走らせマンションに近づくと、マンションの管理人が報道陣に説教をしているのが見えた。夜通し敷地内で張り込まれるというのはたまったものではないだろう。俺は管理人に深くお辞儀をしてからマンションのエントランスに向かった。

「桐原くん、いくら君のお父さんのことがあるとはいえ、こんな調子じゃあ……」

「本当にすみません」

小声でやりとりをしてセキュリティを解除し、マンション内に入る。その時、柘みちるがエレベーターから降りてくるのが見えた。振り向くと管理人は満足げな表情をしている。俺は嵌められたのだ。

「桐原くん、偶然ね！」

狙っていたはずなのに驚いた様子を見せる柘みちる。

「柘さん、どうして……」

「ヒカルくんから聞いて来たの」

「それはわかるけど、その鍵は……」

「私の部屋の鍵よ。空室があつたから借りたの」

外の報道陣には俺の部屋の鍵と認識されてもしょうがない。

「そうですね」

俺は彼女を無視してエレベーターに向かった。

「待ってよ、せっかく会えたのに」

「別に同じマンションならいつでも話せるでしょ。報道陣に撮られる場所でわざわざ話す意味あるの？」

「そ、それって今度話し……」

俺はエレベーターの扉を閉じた。少し強く出過ぎたかもしれないけれども、彼女が報道陣を利用しようとしたのは明らかだった。このマンションから引越すことも考えよう。

荷物をまとめて優の部屋に戻る。

「ただいま」

小さく発した声に、鈴音が応えた。

「悟さん！どこへ行かれてたんですか？」

「ちよつと、荷物を取りに」

「心配しました。お二人はまだ寝ていらっしやいます」

「そつか。俺のせいでこんなことになって、悪いな」

「いえ、悟さんにはいつも助けていただいていますから」

「俺は大したことしてないよ。常にトラブルメーカーだし」

俺はコップに水を注いで一気に飲んだ。

「私、お二人の恋を支えますから。安心してくださいね」

ふたりの葛藤

佳恋は優の家で朝食をとると、撮影の仕事へ向かった。控え室で話しかけてきたのはみちるだった。

「先輩」

テンションの高いみちるに佳恋は戸惑っていた。

「みちるさん？」

「みちるでいいですよ、佳恋先輩。今日から一緒にお仕事ですね」

「そうね、よろしく」

静かに答えるとみちるは大きな声を出した。

「あれ〜テンション低いですね。自慢のスマイルはどこにいったやつたんですかあ？」

「佳恋さん、撮影入ります」

スタッフの声に佳恋はすぐ反応した。これ以上会話を続けるのは苦痛だった。

「はい、今行きます」

休憩の時間になるとみちるはすぐ佳恋の隣りに座った。

「ところで先輩は悟くんのこと、どれくらい知ってるんです？」

「どれくらいって…」

「悟くんの中学時代の話とか、聞いたことありますか？」

「あるけど」

不良だった悟が立ち直るまでのことはすでに認識済みだ。しかし、みちるは勝ち誇った様子で続ける。

「そうなんですか！。じゃ、それ前提で付き合ってるってことですよね？」

「前提？」

「悟くんは相当暴れ回ってました。きつと恨みとか買ってますよ」「確かにそうね」

逆恨みではあるが、茂木は悟を恨んでいた。穂純組も恨んでいるに違いない。

「私は気にしないけど」

「悟くんの昔話、雑誌とかでバラしちやおうかな」

ニコニコ笑うみちる。みちるは中学時代以降の彼を知らない。もちろん中学時代の事件の真相も。だとすれば、みちるの勝手な作り話で悟が傷つけられる。佳恋は焦りを感じた。

「あなたこそ、悟くんのこと、どれだけ知ってるの？」

「私は中学時代、同級生だっただけですけど、よく知ってますよ」

「私の弟と悟くんは幼稚園と高校で同級生だった。弟からたくさん話を聞いているの。あなたの知らない時期の彼について」

「でも、佳恋先輩。忘れないでくださいね。過去の過ちはどんなに悔やんでも消えないんです。彼がどんな風に更生したか、私は知りませんが、彼が犯した罪は一生付きまとうんですよ」

佳恋がマンションに帰ると、報道陣がシャッターを切った。意気消沈した佳恋は気にすること無く部屋へ向かった。

部屋で悟は食事を作って帰りを待っていた。

「お帰りなさい、佳恋さん」

元気のない声が佳恋には気がかりだった。

「どうしたの？」

「すみません…いろいろ迷惑かけて…」

「そんなに気にしないでよ…何かあったの？」

「いえ、あの、報道陣多いなって思ってた」

悟はスパゲティをテーブルに運んできた。

「できましたよ、食べましょう」

悟は明らかに隠し事をしている。しかし今聞くべきではないだろう。佳恋は知らないふりをした。

「美味しそうね！いただきます」

佳恋さんには言えなかった。さつき柊みちると遭遇して言われたことは。

「悟くんの昔話、バラしちやおうかな」

マンションの廊下で突然声をかけられた。

「え……」

俺はみちるの顔を見て確信した。彼女は本気だ。

「あの頃の話が世の中に広まったら、悟くんだけじゃなくて佳恋さんにも迷惑がかかるよ。」

「それは……」

「私がバラさなくたって、いつか誰かがバラすよ。ネットですぐに広まるんだから」

「……」

「私と付き合つてよ、悟くん」

俺は何も言えなかった。佳恋さんに迷惑を掛けることが一番辛いのだ。

「……」

「明日の朝までに答えを出して。お願いよ」
それで二人は分かれた。

佳恋は話題を変えようと今日の出来事を話し始めた。

「今日、編集長に怒られちゃった。明日の撮影がうまくいかなかったら来月号の表紙、みちるちゃんにされちゃうかも」

「調子が上がらないときもありますよ」

すかさず悟がフォロワーを入れる。それが佳恋には嬉しかった。

「そうならいいんだけど、もう若手モデルってジャンルから外れてきたのかなあー。魅力がなくなってきたのかなあー」

最近薄々感じていることだ。デビューして三年が経ち、同じ路線では続かないことくらい承知している。そろそろ売り方を変えるべきなのだろうか。

「佳恋さんはとても魅力的だと思いますよ」

「あ、ありがとう」

率直な感想に佳恋は顔を赤らめた。

「俺は佳恋さんがトップモデルだから好きになったわけじゃないです。佳恋さんが素敵な人だから、一緒に居たいと思っただけです。一度表紙を降ろされただけで、魅力がなくなることはないです」

「そう言ってもらえると、嬉しいな……」

「だから、俺のわがママを聞いてもらえませんか？」

スタートライン

「え？」

佳恋は悟の真意がつかめずにいた。悟は心を決めて話し始めた。

「佳恋さんがモデルでなくなってしまうかもしれない…けど俺は一緒に居たいんです…」

「どついう意味？」

「俺の過去が明らかになれば、佳恋さんにも影響が出るから…みちに付き合わなければバラすって言われて…でも俺…」

佳恋は黙って悟の言葉を聞いていた。

「佳恋さんの仕事が減っちゃうかもしれないけど、それでも俺と付き合っただけいいんです。だめですか？」

佳恋の心は決まっていた。

「ありがとう。私はモデルで居るより、悟くんのそばに居るほうがいいよ」

悟はようやく笑顔を見せた。

「じゃあ、その、発表しませんか？俺たちのこと」

「そうね。社長にお願いしてみる」

その翌日、報道各社にFAXが送られた。それはモデルのカレンが桐原悟と付き合い合っていることを報告するものだった。そして、相手が学生ゆえ、報道は最小限にとどめて欲しいという言葉も記されていた。

佳恋は絶好調だった。撮影が順調に進み、予定されていた仕事とは別の特集にも写真が使われることになったのだ。対するみちるは不機嫌にしており、全く仕事にならないようだった。

「先輩、本当にばらしちゃいますよ。いいんですか？」

「いいわよ」

佳恋の言葉にみちるは絶句した。

「私はモデル業よりも悟くんのほうが大事だから」

一ヶ月後、みちるは事務所をやめ、アメリカへと帰っていった。

事務所には国際弁護士を目指すと告げて。

「これで堂々と悟くんとデートできるわね」

佳恋はワクワクしていた。しかし、この一件はスタートラインに過ぎなかったのだ。

エピソード

「頼む。どうか戻ってきてくれ」

深夜、とあるモデル事務所。社員が帰ったあとのオフィスで一人電話をかける男がいた。

「今更なんなんですか。俺はそんな話信じられない」

電話の向こうの男が語気を強める。

「大丈夫だ。お前の才能は俺が一番良くわかってる」

一呼吸おいて男は続けた。

「彼女と釣り合う男はお前しかいないよ」

その言葉に電話の向こうの男は考えた。そしてすぐに結論を出した。

「わかった。行こう。明日にでも」

そうして交渉は終わった。窓の外にはクリスマスの飾り付けをする人々。明日から12月。だいぶ寒くなってきた。

「何とか今年を無事終えられますように」

男は祈りながらオフィスを後にした。

エピソード（後書き）

「世話焼き男子のクリスマス」に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9405n/>

堂々美女 VS 謎の才女

2010年10月8日13時12分発行